

金融機関の発達史について*

加藤俊彦

1. はじめに
2. 明治時代 — 大蔵省と東洋経済新報社
3. 第一次大戦前後 — 銀行家の金融史研究
4. 恐慌と戦争の時代 — マルクス経済学の影響
5. 第二次大戦後 — 総合—分化—総合
 - (1) 1950年代
 - (2) 1960年代 — 研究の細分化傾向
 - (3) 最近の傾向
6. 結びにかえて

1. はじめに — 問題の限定

金融機関の発達史にはいろいろあるが、本日は次のように問題を限定したい。

まず時期的には明治の初めから太平洋戦争が終わるまでの時期を対象とする歴史研究だけをとりあげたい。したがって、敗戦後の混乱期や高度成長期などの金融機関の活動を対象とした歴史的研究には触れない。

今一つは、金融機関の個別的研究、例えば日本銀行、特殊銀行、あるいは都市銀行についてそれぞれ歴史的研究があるが、本日はそれらには触れず、日本の金融機関を一応網羅的、全体的に対象にしているような研究だけを取り上げることとする。

次に、説明の順序として①明治期の研究、②第一次大戦前後の諸研究、③1920年代の慢性的恐慌とその後に引続く戦争の時期の研究、④第二次大戦後の諸研究、というように分けて述べることにしたい。

2. 明治時代 — 大蔵省と東洋経済新報社

明治時代にまず総括的に日本の金融機関の発達について叙述したのは「明治財政史」である。これは1904年から5年（明治37～38年）にかけて刊行された15巻にわたる膨大な書物であるが、その中で11巻から14巻までが通貨および金融機関に関する叙述である。金融機関については12巻以降で明治期に創設された国立銀行、普通銀行、あるいは日本銀行、特殊銀行について非常に詳細な記述を行なっている。その後の研究は、この「明治財政史」に依拠するところが多い。そういう意味では、これは日本の金融機関の研究に大きな功績を残した文献だと言えよう。

ただ、この本の特徴の一つは、「松方伯財政事歴」という別の名前がついていることからわかるように、明治期の日本の財政金融の指導者だった松方正義伯の功績をたたえるという意味合いをもっており、その意味では松方の側から、つまり大蔵省サイドから書か

*金融研究所ではその歴史研究の方向を設定するための一助として、加藤俊彦顧問に従来の金融史研究をサーベイする標題講演をお願いした。本稿はそれを取りまとめたものである。

れていたということである。

周知のとおり、松方正義が財政金融の当局者になったのは明治14年(1881年)以降であって、その前は大隈重信等であるが、大隈重信の業績などについてはこの本ではあまり詳しく触れられていない。その意味で、大隈重信の事蹟をしめす大隈文書などで補っていないと明治の金融機関については判らないことがある。

もう一つは、これは当然大蔵省の基礎的な資料をすべて利用して書かれたものと誰しもが思うわけであるが、だんだん明治期の財政史研究が進んでくると、実は案外大蔵省にある基礎的な資料が使われていないのではないかという批評が出てきた。たとえば、沢田章氏(故人、三井文庫の人)が「明治財政の基礎的研究」(1934年<昭和9年>、宝文館)という本の中でその点を指摘している。

次にあらわれてくるのは民間のジャーナリズムの仕事である。一番有名なのが「明治金融史」で、1909年(明治42年)に東洋経済新報社から刊行されている。これは明治の金融の歴史叙述と同時に、この時期における現状分析を行なったもので、これも「明治財政史」がある程度基礎になっているが、そのほかに東洋経済新報社自身でまとめた資料も使いながら執筆されている。「洛陽の紙価を高めた」ともいわれ、面白い本である。後に述べる「金融六十年史」はこの「明治金融史」の大正版ともいうべきであろう。

3. 第一次大戦前後 — 銀行家の金融史研究

第一次大戦前後になると、銀行家が主流になって銀行史の研究がすすめられた。ここでは滝沢直七氏の「稿本日本金融史論」、明石照男氏の「明治銀行史」、石沢久五郎氏の「本邦銀

行発達史」の3冊を取り上げる。

私はむかし土屋喬雄先生のお手伝いをして「日本金融史資料・明治大正編」(全25巻)の編纂の仕事に携わったことがあるが、その時に土屋先生から「この2冊の本を読んでおきなさい」と言われたのが「稿本日本金融史論」と「本邦銀行発達史」の2冊だった。

「稿本日本金融史論」は千ページぐらいの厚い本であるが、金融史の研究にさいし最初にしたことでも手伝って私にとって印象的だった。この本は1912年(大正元年)に有斐閣から出ているが、著者の滝沢直七は栃木県の銀行家である。まだ若い時期に病気の父親を看護しながら一気に書いたと言われる本である。この本の特徴は、視野が広く、金融だけでなく日本経済の歴史的発展、資本主義の発展過程を一応捉えているという点にある。周知のとおり明治10年(1877年)代に西南戦争を契機としてインフレーションが起こり、明治14年(1881年)以降松方正義が紙幣を整理してこのインフレーションを片付けてしまう、ということがあった。この明治10年代のインフレーションとデフレーション、滝沢氏の言葉を借りていけば「貨幣価格の変動」というものが、日本の経済あるいは日本の金融機関の成立、発展にどのように影響したか、ということが前半の分析視角になっており、後半は日清戦争と日露戦争が日本の経済にどのように影響し、それによって金融機関がどうなったか、ということが分析視角となっている。本書は冒頭に多数の参考文献を掲げ、本文はそれらを利用しながら達意な文章で書かれているが、後の学術書のようにいちいち引用文献を明らかにしているわけではない。本書は日本の金融史研究の古典と言われており、1968年(昭和43年)に復刻されている。明石照男氏の「明治銀行史」は1935年(昭

和10年)に改造社が刊行した「現代金融経済全集」の中の一冊として公刊されたものであるが、その序文によると、この「明治銀行史」を著者が書いたのは、ずっと前で1912年(大正元年)ごろであったとされている。このころに「経済大辞書」の刊行がくわだてられ、渋沢栄一がその銀行の部の執筆を引受けたが、渋沢栄一が忙しいので明石氏が代って原稿を書いた。ところがその「経済大辞書」は刊行できなくなったので原稿はそのままになっていたが、1927年(昭和2年)に「龍門雑誌」に掲載し、さらに1935年(昭和10年)になって改造社が「現代金融経済全集」を出版するに当たり、同社から要請があり刊行されたのである。

この書物は日本の金融史の中では面白い本のひとつだと思う。明石氏は序文の中で、この本を書いたのは大学を出て間もなくの時期であったため若さの余り突飛なことを書いた、という意味のことを書いておられるが、われわれから見るとその突飛だという点の方が面白い。周知のとおり、明治政府は外国のことを調べながら日本に銀行制度を移植し、同時にそれを保護・助成し、また監督した。明石氏はそういう明治政府のやり方に対して、民間銀行の立場からいろいろなことを言っている。しかも経済思想としては非常に自由主義的である。政府の保護・監督というのはよろしくないのだというアダム・スミス流の考えがあって、それが随所に出てくるのである。

つぎに、石沢久五郎氏の「本邦銀行発達史」(1920年<大正9年>、同文館)に注目したい。この本はいわば日本における銀行発達史の本格的な学術研究書としての体裁と内容を備えた最初のものであろう。石沢久五郎は銀行家と言っては言いすぎかとも思うが、今でいえば全国銀行協会に当たる銀行集会所の調

査部などにおいて、統計を扱ったりしていた人である。早稲田大学を出た後アメリカの大学を出て銀行集会所に入り、そこでこの本を書いた。

この本は引用資料の出典もきちんと明示しており、学術研究書としては最初のものと思うが、ここで注目しておきたいのは、この本で初めて次の二つの方法が提示されたということである。

一つは、日本の金融機関の歴史研究にさいし日本の金融機関だけ研究しては駄目で、国際比較が必要になってくる、つまり比較銀行史というか、金融機関の成立・発展状況を外国と比較しながら研究しなければならないということ、今一つは、金融機関の発達というものは産業の発達と結びつけて、産業の発達を考察しながらそれとの関連において銀行の歴史を見ていかなければならないということ、である。この二つの方法を明示したという点で、この本は金融史研究が一段と進歩したことを示すものと言えよう。もっとも、そういうことを提示してはいるが、実際にはそれほどこの点が明らかにされているわけではない。比較銀行史の観点が必要だとは書いてあるが、実際にはそれは著者のねがいであってこの本で具体的に叙述しているわけではないし、また産業の発展との関係という点では、ただ銀行の発展の時代区分を産業の発展を念頭に置きながら行なっている、というのとどまっている。

4. 恐慌と戦争の時代 — マルクス経済学の影響

次に恐慌と戦争の時代であるが、まず1924年(大正13年)の「金融六十年史」(東洋経済新報社)に注目したい。これは今でも金融史の研究家がよく使う非常に便利な書物であ

る。これは、「明治金融史」が非常に好評だったのでその続編を書こうとしてその企画が始まったのであるが、実際にはほとんど新しく書きおろされたもので、石橋湛山氏以下当時東洋経済新報社にいた新鋭のジャーナリスト達が執筆にあっている。これも非常に面白い書物だといってよい。

このころになると、大正デモクラシーの発展とともに日本の経済学界の中にマルクス経済学が輸入されてくる。そして金融史の中にもマルクス経済学の影響を受けた書物があらわれてくる。この時期になると鶴野久吾著「日本金融発達史」(1925年<大正14年>)、野村順之助著「日本金融資本発達史」(1931年<昭和6年>)、それから大島唯史著「日本金融資本発達史」(1932年<昭和7年>)という3冊の本が刊行されているが、実はこの3冊は著者の名前が違っているのと発行年月日が違っているのを別にするると本文は全く同一の書物である。鶴野久吾の書名は金融発達史となっているが、あとの2冊は金融資本発達史となっている。金融資本という概念、つまりマルクス経済学でいうところの金融資本という概念はそのころに輸入され盛んに使われるようになった。そこで1925年(大正14年)に出た鶴野の「日本金融発達史」を「金融資本発達史」とした方が売行きがいいのではないかという考えから1931年以降「日本金融資本発達史」と名前を変えて刊行したものである。ところでこの3冊の著者は実は、日本共産党の当時の中央委員であった市川正一という人であった。

マルクス経済学からいうと、金融発達史と金融資本発達史というのは非常に違うわけであり、これを峻別しなければならないものである。したがって著名なマルクス経済学者である野呂栄太郎氏は「市川正一ともあろう者

が金融資本発達史と金融発達史との区別がつかないわけではないので、金融資本発達史と名前を変えたのは共生閣という本屋の主人に達しない」と、あとになってそれをわざわざ東大新聞で明らかにした。

ところで、この本の内容は金融の発達史である。これは前に紹介した「金融六十年史」の影響を受けた書物と考えていいが、ただここではかなり視野が広がってきている。金融の発達をいわば日本の経済の発達、日本の資本主義の発達と関連させて考察しようとしている。また、銀行資力の集中、集積の問題を取り上げている。それほどマルクス経済学に深い理解があったともみられないが、いわば金融の歴史をある程度左翼的な立場からまとめたというような書物である。

なお、この時期について言うときまだアカデミズムでは明治以降の金融の発達史をそれほど取り上げていない。これは、当時の歴史家は、歴史学の対象とするものは大体徳川以前の問題だという理解が強かったためと思われる。今では現代史が盛んとなり、経済史家もいろいろな現代的な問題も取り上げているが、当時はそうではなかった。金融の問題は当時の一般の経済史家ではちょっと取り付きにくいということもあった。またそのころでは、一般の経済史家では金融の技術的なことが分からなくて金融史には取り付きにくかったこともその原因と思われる。

昭和期に入ってくると、マルクス経済学の影響のもとで封建論争と呼ばれる論争があった。この封建論争は金融史研究にも影響をあたえた。もともと封建論争そのものは当時の革命家たちが、日本の資本主義の権力構造はどういうものであるかということを政治的な課題、戦略的な課題として提起したものである。しかし、これを日本資本主義論、あるいは日本

資本主義発達史の問題としてみると、以下のような問題となる。日本の資本主義はヨーロッパの資本主義にくらべて遅れて資本主義化したため、どうしても遅れたものを残している。農村においても、日本ではイギリスのような農業の資本主義化が進まず、地主と小作との古い関係が残ってしまう。その古い形が残っている一方で、資本主義が紡績業を中心として明治年間にどんどん展開してきた。経済学的には、その古いものと新しいものをどのように評価するかという問題にかかわってくるわけである。

日本が資本主義化してきた時に古い関係が非常に強く残って、それが日本の資本主義の性格を規定するという考え方と、そうではなくて、古い関係が残ったにしてもそれはだんだん消えていってしまうものであるという考え方、つまりその古い関係を重く見るか、だんだん消えていくものとして見るか、というところでいろいろ学説が違ってくるのだと思う。前の説を封建派と呼び後の説を労農派と呼んでいる。ここで石浜知行氏の「特殊金融機関史論」（1937年〈昭和12年〉、育生社）を取り上げてみよう。これは特殊金融機関だけを対象にした書物である。はじめに金融機関を網羅的に取り上げたものだけを対象とする、と断ったのにもかかわらず、ここでこれを取り上げたのは、本書がいわば労農派の金融機関論を最も典型的に反映している書物と言えるからである。著者は特殊金融機関、すなわち1880年（明治13年）の横浜正金銀行に始まって日本勸業銀行、農工銀行、日本興業銀行、それから植民地金融機関、大蔵省預金部等々を歴史的に考察しながら、同時に1930年代のこれら金融機関の意義を分析している。その場合の著者の視点の特徴は、特殊金融機関というものは、明治の初めに日本がヨーロ

ッパ諸国に対抗して急速に資本主義化しなければならなかったことから作られたものだ、というところにある。したがって、資本主義が発展してくると、こういう特殊金融機関はだんだん普通銀行に似てくる、とくに勸銀、農工銀行は初めに与えられた使命から離れて普通銀行化してくる——そういう傾向があるということを著者は論証しようとしている。要するに、特殊金融機関というものは日本の資本主義の特殊性のために明治政府によって作られたが、次第にその性格も変わってくるし、普通銀行化していく、という見方である。

一方、飯淵敬太郎氏の「日本信用大系分析論稿」という論文がある。これは1935年から36年（昭和10～11年）にかけて「経済評論」（これは今日の「経済評論」ではなく戦前の雑誌）に連載され、敗戦後（1948年〈昭和23年〉）に「日本信用体系前史」として学生書房から刊行された書物である。ここでは上述の「古い関係」を重く見ている。すなわち、日本の農村は資本主義化していないし、そこには封建的關係が残っており、そういう封建的關係が日本の資本主義を、したがって日本の金融機関を強く規定している。日本の資本主義は半封建的資本主義であり、日本の信用体系は半封建的な性質をもっている。同時に銀行自身がそういう古い性格をもっているだけでなく、もっと下層に質屋、無尽、その他高利貸などが存続している。しかもそれらは上部の銀行の性格を規定し、それを支えていると主張している。

本書は封建派の中心であった山田盛太郎先生が「日本資本主義分析」（1934年〈昭和9年〉、岩波書店）で論ぜられたことの金融版であると考えられる。山田盛太郎先生の半封建的資本主義論を金融に当てはめればどうい

うことになるか、という形で書かれたものである。

もっとも本書は飯渕氏がこれから研究していく方法あるいは構図をしめたものであり、くわしい論証をしているわけではない。したがって、この著者が生きていたら構図に肉付けをしているいろいろなことを論ぜられたことと思うが、惜しむらくは、この本の刊行後間もなく亡くなった。しかしこの書物は後々強い影響力をもった。これは、労農派の人達の見方 — 遅れた関係はだんだんなくなってくるという見方 — に対して、そうではなく、遅れた関係は日本資本主義の構造の中に深く入り込んでいるのだという考え方を基礎としており、この見地から日本の金融構造の特質を把握しようとしているものである。

次に、白井規矩雄氏の「日本の金融機関」という書物を紹介しよう。この人はもともと三井信託会社にいた人であるが、この「日本の金融機関」は1939年(昭和14年)に森山書店から出された。この本を読むと、これはやはり封建論争の影響を強く受けているというように思える。しかし白井氏自身は、封建論争にはあまり影響を受けていないと言っている。信託銀行の研究家で有名な麻島昭一氏が生前の白井氏にインタビューした時、この点をただしたところそう答えられた、と聞いている。

「日本の金融機関」は単なる金融機関の歴史ではなく、むしろ歴史的研究を基礎に置きながら当時の日本の金融機関の特質を描いている非常に面白い本で、今でも大きな影響力をもっている。それはどういうことかと言うと、先に述べた石沢久五郎氏が指摘した日本の金融機関の歴史研究にさいしては、国際比較をして見る必要があるという点、この点については石浜・飯渕両氏もある程度すすめたが

この書物はいっそうそれを推し進めているということが一つ、もう一つはこれも石沢氏が指摘したことであるが、産業との関係を見なくてはいけないということ、この点についてもこの書物の中で立入った分析が進められていることである。さらに、後年日本の金融機関の歴史的発展は日本の資本主義自身の歴史的発展の段階に即して見なければいけない、との説が有力になってくるが、このような段階規定に即して銀行の発展も見なければいけないという考え方もこの書物の中ではかなりはっきりうち出されている。それから、日本の金融の構造は二重構造であるという指摘もしている。さらに最近よく言われている重層的金融構造などという問題にも触れている。そのほか金融機関と国家財政との関係にも触れている。

そういうわけで、この書物には現在日本の金融史の研究者がそれぞれ興味をもって取り上げている問題が不完全な形であるにせよ全部出そろっているのである。この本は1972年(昭和47年)になって柏書房から内容は少し修正されたが復刊された。それというのも本書がのちの研究者に多くの示唆をあたえたからであろう。

以上が第二次大戦終結までの時期の研究である。

5. 第二次大戦後 — 総合—分化 — 総合

(1) 1950年代

これからあとは戦後の研究になるが、1957年(昭和32年)に私は「本邦銀行史論」(東大出版会)という書物を書いた。続いてほとんど同時に明石照男・鈴木憲久の両氏が「日本金融史」3巻(東洋経済新報社)を刊行さ

れた。もっとも明石氏は第2巻を脱稿したところで(第1巻が出る前に)亡くなっている。したがって、第3巻は鈴木氏が明石氏ならばこう考えるだろうということはある程度類推しながら執筆されたと序文にある。

明石・鈴木両氏の「日本金融史」はいうまでもなく明治だけではなく大正・昭和時代も対象としている。昭和を対象とするとすると明石氏も若い時のようにあまりきびしい批判をされてはいないが、そつなく歴史的事実がまとめられ、しかも何となく自由主義的というか統制をしりぞける気配がうかがわれる書物である。鈴木憲久氏は明石氏に非常に私淑した人で、拓殖大学の総長をした方である。

松成義衛・三輪悌三・長幸男3氏の「日本における銀行の発達」の刊行は少しおくれて1959年(昭和34年、青木書店)である。したがって1950年代には、まだ日本の銀行・金融機関を全体として考察するという、いわば総観というか通史というか、そういう書物が刊行された時代である。

自分の著作のことを言うのはおこがましいが、「本邦銀行史論」はやはり封建論争の所産であって、その点だけを述べておくと、結局日本の資本主義は遅れて出てきたものである、したがってどうしても外国に追いついていかなければならない、そのためには銀行制度を移入してそれを梃子にしながら日本の経済を発展させるという方針を明治政府はとった、そのため日本の銀行は必然的にイギリスのコマーシャル・バンクや大陸型のドイツの銀行とは異なる発展をした、ということを書いたかったのである。どのように違うかという、日本の銀行は初めから産業との関係が深く、これは大都市銀行——三井や三菱や住友——においてもそうだし、中小銀行においてもそうであり、同じ経営者が銀行をやったり事

業をやったりする。これが機関銀行と言われるものである。

従来機関銀行と呼ばれているものは、田舎の金持が一方で事業をやりながら一方で銀行をやり、銀行で集めた資金を自分でやっている事業に回してしまう——これは昭和の初めの金融恐慌の原因になるわけであるが——そういう性格をもつ中小銀行のことをそう呼んでいた。私は、そうした性格は中小銀行だけではなく財閥銀行でも同じなのだ、三井銀行とか三菱銀行や住友銀行についても同じような機関銀行的性格をもっているのだ、ということを書いた。そういう機関銀行は、銀行としての完全な独立性をもっていない。少なくとも明治、大正、昭和の初め、つまり敗戦前について言えばそのような傾向がみられる。例えば三井銀行について池田成彬氏は「三井物産は景気の良い時はほかの銀行に行ってしまう、景気が悪くなって金融が締つてくると三井銀行にやってくる。そのときボンと断わるわけにはいかない。そこが三井銀行の悲しい所で物産がいけなくなれば三井銀行も駄目になる」といった意味のことを「財界回顧」という書物のなかで述べている。

そういう意味で私は、機関銀行というのは中小銀行だけではなく、大銀行の場合もそうした性格があるのだと述べた。同時にそれが、イギリスのコマーシャル・バンク——産業金融をやらず、流通信用を主とするイギリスのコマーシャル・バンク——や、株式市場と結びつきながら設備資金を大量に供給するドイツの大陸型銀行とも違うところだ、と述べた。これに対しては、「加藤はイギリスのコマーシャル・バンクとドイツの産業銀行とに対して日本の機関銀行というものを一種のカテゴリーとして提示している」といったように受けとめられ、「それは無理である」との反駁を受け

た。

次に私はこの本の中で、銀行の発展を資本主義の発展段階に即して見ていこうとした。ただ日本では資本主義の発展段階を原始的蓄積の時代だとか産業資本の自由主義の時代だとか帝国主義・独占の時代だとかいうようにはっきり区別することができない、つまり後進国だから段階規定があまりできない、ということを考えてあまり機械的に段階区分を行なわなかった。

もう一つ、私はこの本の中で特殊銀行についてかなりページを割いた。私は石浜知行氏のように特殊銀行を普通銀行化のコースでとらえないで、独占の段階になると新たな役割をもって来るものと考え、その点を明らかにしようとしたからである。

(2) 1960年代一研究の細分化傾向

1960年代になると、この辺から日本の金融史研究は大きく変わってきたように思われる。どのように変わってきたかという、研究が細分化する傾向をもってきたことである。金融経済研究所は1965年から70年(昭和40~45年)にかけて東洋経済新報社から「日本金融市場発達史」(1~3巻)を刊行したが、これはやはり、個別研究をあつめたもので、通史ではなかった。ここにすでに細分化の傾向があらわれてきているわけである。

次に、1966年(昭和41年)には渡辺佐平先生と北原道貫氏の共編で「銀行」という本が交詢社出版局から刊行された。これも二人の共編になってはいるが非常に多くの執筆者を擁していて、各専門分野の人が各金融機関について執筆している書物である。

全体的な金融史は、むしろ銀行家の人達によって書かれているにすぎない。例えば日本銀行の石川通達氏の「やさしい日本金融史」

(1965年<昭和40年>、文雅堂)、あるいは竹沢正武氏の「日本金融百年史」(1968年<昭和43年>、東洋経済新報社)などである。

(3) 最近の傾向

この細分化の傾向は最近になってますます強まっているのであるが、その理由は何かという、渡辺佐平先生が先に述べた「日本金融市場発達史」の第一巻で「今や日本の銀行史なり金融史というものは通史を書くにはまだ個々の事実が分からないことが多すぎる。今の段階ではもっと個々の事実を確めて、もう一ぺん書き直さなければいけない」といった意味のことを、つまり個々の事実の究明にかえれということ述べておられる。

そのころ私自身も大内力氏ほか数名の人と一緒に明治の初期の国立銀行の実態調査をやって本を出したことがある。またアカデミーの中でも金融史研究がだんだん定着してきた。アカデミーの中では歴史の研究論文にはきびしい実証性を要求される。そうすると実証性を要求されるからますます豊富な資料を駆使して限定された問題をとりあつかうようになる。これは何も歴史学ばかりではなくて、最近どの研究分野でもそういう傾向が出てきているように思う。

しかしながら、同時にその研究対象の範囲は拡大してきている。戦前においてはほとんどが大銀行や特殊銀行の研究であったが、今ではそれを取り巻くいろいろな金融機関、例えば貯蓄銀行、信託銀行、下層金融機関などにも対象がどんどん広がってきている。これらは進藤実氏や麻島昭一氏や渋谷隆一氏などの研究によるが、とにかく一人が対象にするものは小さくても、その対象にされるものは増えてきているという傾向がある。

もう一つの傾向は、産業史の研究をやって

いる人達が金融史の分野に入ってきたということである。それは、産業史をやっている人達は最初は生産構造を主な研究対象とするが、しだいに資金関係に目が向いてくる。その先頭を切って非常に強い影響をあたえたのは、山口和雄氏の「産業金融史研究」である。山口氏は紡績業や製糸業の研究をすすめるにあたって若い新鋭の研究者を集めて、これの資金関係の研究にむかわれた。生糸輸出、綿糸・綿布の輸出、綿花輸入に関連する金融問題を取り上げた。そうすると地方銀行と横浜の商社、横浜の銀行、最後にそれを支えている日本銀行や横浜正金銀行——この一連の金融機構というものが、これらの研究で明らかになってきた。それらは「日本産業金融史研究」全3巻（「製糸金融編」1966年、「紡績金融編」1970年、「織物金融編」1974年、東大出版会）にまとめられたが、これが逆に金融史プロパーの研究者に大きな影響を与えたと私は思っている。そのほか貿易史の研究者たとえば都立大学の水沼知一氏のような人が貿易史を研究していると、横浜正金銀行史の研究につながってくる。こうして金融史研究者の範囲はしだいに広がってきた。

ところで対象があまりに細分化すると、日本の金融の特質なり金融機関の特質なり歴史的発展の特質なり、あるいは現在の金融構造の特質なりを視野におかない個別の研究もあらわれてくる。言いかえれば、個別の研究を絶えず全体との関連を意識しながら進める、ということが必要なのだが、それが失なわれる傾向がある。ただここに資料があったからこれをやってみようというような研究も出てきた。

そのような傾向に対し、日本の経済の特殊な性格と関連させて総合的に日本の金融構造を歴史的に明らかにしようとする研究が最近

も出てくるようになった。

たとえば朝倉孝吉氏の編著で「両大戦間における金融構造」（1980年〈昭和55年〉、お茶の水書房）という書物が刊行された。これは、日本の若手、中堅を含めてかなりの人数の研究者を集めて、地方銀行を中心として両大戦間における日本の金融構造はどうなっているのかという問題を総合的に解明しようとするもので、先に触れた重層的金融構造という問題と絡め合わせて、両大戦間における各金融機関相互の関係、すなわち日本銀行と地方銀行、地方銀行と都市銀行、あるいは地方銀行どうしの関係ないし下層金融機関との関係、あるいは特殊金融機関との関係——それらに一種の鳥瞰図を与えよう、ということを企図して書かれている。この本の書評を私は「地方金融史研究」第12号（1981年3月）に書いたのであるが、まことに注目すべき著作であり、いくつかの欠点を残しつつも現在の研究水準を向上させる意義をもっている。

このほか渋谷隆一氏の「明治期・日本特殊金融立法史」（1977年〈昭和52年〉、早大出版部）や麻島昭一氏の「日本信託業法立法史の研究」（1980年〈昭和55年〉金融財政事情研究会）などは新たな方法を提示したという点で注目される。これは、金融機関の発達史の研究にさいし、広く法律や政治の分野にも目をくばり総合的な研究をしなければならない、としている点で注目される。

最後に触れておきたいことは、これらの従来の経済史家、金融史家の仕事とは異なった新しい角度から、近代経済学を研究している人達が日本の金融の歴史的発展を研究するようになったことである。たとえば朝倉孝吉氏と西山千明氏の「日本経済の貨幣的分析（1868—1970）」（1974年〈昭和49年〉、創文社）という本がある。これは従来の手法と

は違って、細かい統計的な研究を積み重ねて金融の分析をしているものである。もう一つは寺西重郎氏の「日本の経済発展と金融」（1982年<昭和57年>、岩波書店）である。私はまだ読了していないが、この本は金融上の興味ある諸問題を新しい手法で研究している。

6. 結びにかえて

以上いろいろと述べてきたが、実は日本銀行でも1976年（昭和51年）に「金融史研究の動向」という本が作られている。これは、本日私が紹介したことより、はるかに多くのいろいろなことが書かれている文献である。

また最近では明治から第二次大戦前までの日本の金融資料や金融理論やこの時期を対象とする研究史を総括して、現在の研究水準をみさだめようとする動きもある。こうしたことから今後は金融機関の歴史的研究はますます盛んになると思う。

（金融研究所顧問、専修大学教授、東京大学名誉教授）